

Afterword

おわりに：創刊の背景とねらい

学際研究の重要性が叫ばれて久しいなか、その学術的受け皿は整備されたとは言い難い状況にあります。学際的な研究助成金は、各本省や各大学内で措置され、意外にも数多くある一方で、学際的な研究に従事する専任ポストはありそうであまりなく、なにより、せっかく学際研究をするも具体的な研究成果の発表の場は個別の学会などといった従来の専門分化した場であることがほとんどです。

学際的な研究教育活動を促進する「ユニット制度」に加え、「全分野結集型シンポジウム」、「京大 100 人論文」、「全分野交流会」等の事業を実施している京都大学学際融合教育研究推進センターでは、なんとかこの状況を打破すべく、「学際研究は、発表する場（論文誌）がないから進展しない」という言い訳のフレーズをこの世からなくすことを目的とし、新しく論文誌を発刊するに至りました。これは、日本で初めて分野や領域を規定しない「学問」に真正面から挑む論文誌です。

分野を限定しない「学問」の論文誌

それが学際的であろうがなかろうが、またそしてどのような学術分野であろうが、「本質」というものは変わるものではありません（場面によって変わってしまうようなものは本質

とは呼べません）。掲載基準としての指針は、「どのような分野、どのような方法、どのような営みであれ、あなた（たち）が考える本質とは何で、その本質をおさえようと考え尽くした深さがいかほどのものか」です。

「発表」の場ではなく「対話・研鑽」の場

本論文誌にはいわゆる（ブラックボックス的な）査読はありません。それよりも厳しいであろう編集者（様々な分野からなる 8 名の研究者）との対話があります。しかも、執筆者と編集者とのやり取りも誌面およびアーカイブにて掲載します。

新しい学問の表現への挑戦

形式を重んじつつも同時にそれを疑うのが学問精神の構え。「論文」という表現形式を問い直し、言葉（数式、実験や調査データを含む）だけでなく、言葉で伝えられないもの（写真等アートで表現されるもの）を無視しない学問の在り方を、この新しい論文誌制作を通じて探求します。ビジュアルとテキストが響きあって表現を拡張させ、読み手に再解釈を迫るような余地を保持し、論文の表現としての可能性を広げる挑戦です。

プラットフォーム化を目指して

本誌は、Vol.0 となる創刊準備号です。編集委員の判断にて今回の執筆者にお声掛けし、ご寄稿頂きました。2022 年度以降に発刊予定の Vol.1 となる創刊号では、執筆者を募集し、学際研究が発表されるプラットフォームとしての役割を担っていく所存です（募集の要項については、次ページに記載）。

「既存の学会誌、論文誌には載せるところがない」

「果たして自分の話は世に通用するか、自分の研究テーマ（問い）を磨いてみたい」

「自分の研究はどうしても言葉（テキスト）に収まりきらない」

「学問」とは本来的には学際的なもの。対話型学術誌『といとうとい』という試みが、学問の歴史に少しでも貢献できることを目指してまいりますので、今後ともご協力賜れますと幸いです。

対話型学術誌『といとうとい』編集部

